



発行
NPO法人いわむら一斎塾
事務局 江戸城下町の館
〒509-7403
岐阜県恵那市岩村町317
TEL 0573-43-5087

怨に遠ざかるの道は、一箇の怒の字にして争を息むるの道は、一箇の譲の字なり

(言志晩録二二三条)

釈意

人より怨みをうけないようにする道(工夫)は、怨の一字にある。すなわち相手を思いやる心をもつことである。人と争いをしないための道(工夫)は、譲の一字にある。すなわち相手に譲る心をもつことである。

右肩上がりの社会・経済の中での競争原理による教育・生活は終わった。本来の心(真心)がもちあわせている怒と譲の心をとるもどす時である。岩村町で販売されている「忠恕之館」、忠とは自ら誠実で真心があるかを事々対して問いただすこと。深く思いやる心でもって相手に対すれば、おのずから譲る心は生ずるものであり、人に施しをする心も又、生ずるものである。東北関東大震災の中で日本人がともどす原点である。

徳増省允

塾報第十号の
発行に想う

副理事長 鈴木 隆 一

会員の交流と情報提供、そして貴重な寄稿文から学ばせていただく「いわむら一斎塾報」が第十号を迎えました。

年二回だけの発行ですが、「佐藤一斎研究会」や「顕彰会」などと志を一にする全国の方たちとの交流を基に、過去十五年間培ってきたその繋がりとご厚情のお蔭で、その都度厚かましいお願いにもかかわらず玉稿をお寄せいただきました。お蔭様で品格と重みがあり、読み応えのある情報誌として高く評価していただいております。これも私たちの活動を支えて下さっている皆様のお蔭と改めて感謝申し上げます。

さて、恵那市では去る四月一日をもって「生涯学習都市三学のまち恵那」が宣言されました。いよいよ、恵那市民が一丸となって佐藤一斎の「三学のすすめ」

を理念とした生涯学習を推進するまちづくりに取り組むのです。

可知市長さんをはじめ、市内の多くの方々のご理解により、佐藤一斎が正真正銘郷里恵那に認識された時でもあります。

そして、「郷土の先人に学び、人づくり・心そだては、まちづくり」を理念に、地道に取り組んできた私たちの活動が多くの方に理解された時でもあると、一斎塾を立ち上げた一人として喜びも入ります。

「言志四録」を学び、それを日常生活で生かすことを目的として、十年間続けて来た「佐藤一斎研究会」の精神を引き継ぎながら、さらに外に向けアピールして行く必要性を感じ、平成十七年夏、「NPO法人いわむら一斎塾」を立ち上げました。

以来、事業として取り組んできた主なことは、

- ①自己修養の為に最も大切にして、いる「言志四録」定例講演会は、岩村公民館を拠点に月一回の割合で実施しています。この三月で百六十四回を迎えました。テキストを、一条ずつ読んで解釈の後、参加者がそれぞれの経験や考えを出し合い、和気藹々のなかで会が進められます。
- ②子どもたちにも「言志四録」の

教えを学んでほしいとの強い願いから、「おじいちゃんとおくく」佐藤一斎さんからの伝言く及び下田歌子著「女子の修養」(現代語訳)を発刊しました。

「おじいちゃんとおくく」は今までに約二万人の方に読んでいただいております。

③毎年、七回程の「特別公開講座いわむら一斎塾」を開講し、多くの市民の方に聴講していただいております。テーマは佐藤一斎、下田歌子、三好学の他、食育、和算、江戸しぐさ、岩村固有の財産を活かしたまちづくりなど、多方面にわたっております。講師は、大学の先生を始めとして今までに延べ四十五名の方にお願いしました。

④NPO法人発足の記念事業として、「東海の三先人に学ぶ」フォーラムを開催し、豊田市(先人II鈴木正三)、東海市(細井平洲)、恵那市(佐藤一斎)の各市長さんにご出席いただき、先人の教えをまちづくりに活かすための意見交換をしていただきました。また、第三回嚶鳴フオーラムを恵那市へ招致していただき、「学ぶことは幸せなり」をテーマに佐藤一斎没後百五十年祭記念に花を添えていただきました。

政治、経済、教育など世の中が先行き不透明で混沌としている現在、私たち一人ひとりが確固たる「一燈」を頼りに邁進する必要があると考えます。「いわむら一齋塾」が、皆様のお力添えをいただきながら「人づくり・心そだて」にお役に立てたらと考える今日この頃です。

先人、三好学博士に思ふ

徳増 省允

本年は三好学博士の生誕一五〇年にあたる。

恵那市では、大正一〇〇年祭とあいまって、ミヨシ桜に関連し、明智町、岩村町を中心に三千五百本余の植樹が計画されている。

岩村町は三月二十六日(土)、実施された。

三好博士は岩村町が出身の世界的植物学者である。桜と花しょうぶの研究者として世に知られる。

特に山桜の研究者で、茨城県桜川市は平安時代より「西の吉野、東の桜川」と謳われるほどの山桜の名所で、桜川磯部稻荷神社を中心に山桜が多く、三好博士が桜の調査に明治四十五年を訪れ、「桜花図譜」に桜川特有の十一種が特定されている。

又天然記念物の保護、景勝地の保

存を一生の事業とし、天然記念物保護法の成立に貢献した。

博士の貢献は日本国内のみでなく国際的にも活躍し、大平洋天然保護常任委員会の委員長として国際的天然記念物保存事業に尽した。

学名に、「ミヨシ」という桜が多いのは博士が発見し研究によるところが大きい。その数一〇〇種になると。

明治・大正を通じ日本の植物学、生理学、生態学者は博士の門下であり、牧野富太郎博士、松村任三博士とも親交があった。

博士は岩村藩士、三好友衛と母とよの次男として文久元年(一八六一)十二月五日に江戸、岩村藩邸内で生れた。

三好家は家老に次ぐ家柄であったが慶応三年(一八六七)大政奉還により、江戸から岩村へ移住し、岩村県庁にもどり、軍事局の司令官をつとめた。三好家の住居は、

熊洞(五区、新屋敷)にあった。明治五年(博士が十一歳の時)父、友衛が死亡した。母とよの伯父にあたる福井県三国町の浄土宗

西光寺の住職のもとに預けられて教育をうける。

明治十一年に石川県第三師範学校に入学し卒業後は小学校教員となるのを望んでいた。岩村町に戻り母親を助けようと思う。

この頃、旧岩村藩領であった神籠村(現・瑞浪市)には、光迪義校と三省義校があり、明治八年一月神籠村と遠子村との合併により土岐村となる。

三省義校は土岐村一日市場の安藤茂左衛門にあった。安藤家は代々一日市場の名家で土岐村の役職を勤め、親戚が岩村にあり、三好学の評判を伝え聞いていた。

土岐村よりの強い要請により、土岐小学校(現・中京短期大学の場所)の校長として若冠十八歳で創立にかゝわる。

早朝に登校し、夜は十時過ぎまで在校して勉学にはげむ。その上毎土曜日には、美濃国上有知村(現・美濃市)まで約十里の道を徒歩で頼山陽の弟子で旧犬山藩の儒者、村瀬太乙のもとに、漢学、漢詩と書道を学ぶという努力家の文学青年であった。

その中で(三年間の教職中)「小学修身読本」全三巻を編集し発行し、「生理小学」や「土岐郡地誌略」等の編集を行っている。

尚、三年間の授業を克明に記した「授業日誌」が残されている。明治十五年(二十一歳)東京大学予備門に入る。

明治十八年東京大学予備門を卒業し東大理学部生物学科に進学する。明治二十二年七月大学院に進み、

研究を続ける。明治二十四年植物学の研究のためドイツに三年間の留学を命じられる。博士二十九歳であった。

三年の留学で国際感覚を養い帰国後も植物学の研究のみでなく、植物学の普及と天然記念物の保存に力をよせ、その保護と景観の保存に貢献した。「環境があつてそこに人間が存する」これは「日本天然記念物概説」の中で提唱し、広い感性をもつて自然をとらえ「景観」と言う言葉を大切にしている。

世界の未来は進むだけ進み、その間に幾度か争いが繰り返されて最後の戦いに疲れる時がくる。その時人類は真の平和を求めて世界の盟主をあげねばならない。

この世界の盟主なるものは武力や金力でなく、あらゆる国の歴史を超越した、もつとも古くもつとも尊い家柄でなければならぬ。

『世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの高峰、日本に立ち戻らねばならない。我々は神に感謝する。われわれに日本という尊い国をつくつておいてくれたことを』

日本を大正十一年に訪れたアインシュタインがのこした言葉。この時の案内役は三好学博士である。今や全ての日本人が真の誇りをもち原点に返る時。

恵那・岩村と一齋塾のこれから —心の教育ルネッサンスの試み—

金城学院大学 米倉 彰一

いま、心の氷河期と言われる。

命を粗末にする異常な事件が後を絶たない。テレビゲーム、携帯メール等が流行り、一方的な伝達時には厳しい自己否定につながり誤解を招くことも。何より会話が減った。それが地域教育・家庭教育を希薄にし、学校教育にシワ寄せとなつて悪循環が続く。未来に夢が描けない時代になった。このままでは日本は一体どうなるのだろうか。もう一度、心の教育プランの復興が不可欠ではないだろうか。山形県南陽市では教育日本一を掲げ徳育に力を入れている。地域力の衰退は少子高齢化ではなく徳育の衰退であると市長。人づくりの教育が、産業の発展や健康で幸福感のある市民生活には不可欠であり、これは単に学校教育のみに負担を求めるのではなく、社会全体が直面する課題に対し、自らが持てる役割を自覚し行動する主体的な学びの実践であり、道徳心に厚い市民意識の高揚を目指すものである。それらは大人や地域全体が手本を示す社会であり、人の和を尊び、興譲に厚い先施の心であり、実践に富み、主義主張を貫く心の強さを兼ね備えた人づく

りを意味するものである、と施政方針に書かれている。

☆それでは十年後の恵那市は：

生涯学習都市宣言をきっかけに

今を生きる先人たちが子どもたちに大切な心を伝え、次世代に残していく心の教育ルネッサンス（コルネ）というしくみが完成。マナブ大使に登録した先人たちが園や学校で楽しく教え、それを振り返り、交流し、改善してまた教えることを生きがいとしている。子どもたちは幼児期から自然や心に対する感性を育んでいる。『心のふるさと恵那・先人顕彰館』が完成し、年間多くの修学旅行生が訪れる。小グループに分かれて岩村を散策する案内役は一齋塾の会員が中心となったマナブ大使。親子のリピーターも多い。観光収入はマナブ大使の養成費や派遣費に使われる。恵那市の成人式は一月三十一日（いつさいの日）に行われる。

☆一齋塾の財産と十年後の役割

恵那市には一齋塾がある。郷土の先人から学び、活かすという息の長い勉強会を通して、親しみやすい絵本を作ったり、講演会を開催するなど、学ぶだけでなく伝え残す実践と人づくりを行ってきた。十年後の恵那市を見据え、今後はマナブ大使としての人づくりと、園や学校で楽しく教える活動が期

待される。できることから気軽に絵本を読んでワークシヨップをしたり、紙芝居・かるた・絵葉書や郷土のお菓子を作ったり、私も皆さんと共に考え微力を尽くしたい。

☆商店街を見習おう

修学旅行と何の関係も無いように思える商店街。実は修学旅行生によつて莫大な利益を得ているところがある。恵那は心のふるさと心の教育をするなら恵那で。恵那の財産を活かし全国にコルネを提唱しよう。先人の心に触れ、生きる力を育むきっかけになる旅を、全国の学校に提案・発信しよう。

☆ESD的手法で心の教育を

環境問題を解決しようとする手法として、ヨハネスブルクサミットで日本（当時の小泉首相）が提唱したのがESD。環境だけを考えるのではなく、平和・多文化共生・人権・食育などあらゆる問題はつながっているから、その根本にある心や感性を世界標準で教育しようというものだ。しかし未だ手を拱いている。恵那市がコルネを実践し世界に問いかけることがESDのシンプルな答になる。その原動力こそが一齋塾であることに疑いの余地はない。十年後、一齋塾がノーベル平和賞を受賞するニュースが世界を駆け巡る。それまでみんな健康で長生きしよう。

学ぶなら、恵那を自指して

名古屋山根保育園長

岡本 典子

岩村一齋塾との出会いは、二年前に恵那で行われた、嚶鳴フォーラムのプレフォーラムのお誘いのチラシでした。当時私は、保育園で食育に関心を持っていて、何か素材から自分で作れるようになりたいと、どこか農地を探していました。そのとき、名古屋の中日ビルにある岐阜県事務所の方が、農地とは関係なく、「このお話いいですから聞きにいつてみてください」と紹介していただきました。名古屋でのプレフォーラムでは、多くの方で会場はあふれんばかりでした。初めて聞く佐藤一斎という名前。一体何をした人なのかも知らずに参加しました。当時の私は、子どもの保育もさることながら、保護者や職員をどう育てていくかについて悩んでいました。変化の激しい時代の中、社会の様々な影響を大きく受けているのは子どもたちです。保護者の方と対話する中で、保護者自身、この混乱する時代の中で、どう生き抜いていけばいいのか、子どもをどう育てていけばいいのか非常に悩んでいます。経済優先の社会の仕組みの中で、よく「時代の先を読め」と言われ

ます。それ故に、早期教育に走ったり、子どもに苦勞をさせたくないとい子どものいいなりになったりしている保護者の姿に悩んでいます。

しかし、意外にも、プレフロラムの中で話されたのは、ポストモダンより、プレモダンという話でした。時代の先でなく、先人たちの歩んできた道を振り返り、その教えを今に活かす。そんな考え方があるのかと、とても新鮮でした。

考えてみれば、子育ては人類が始まってから休むことのない営みです。新しい方法を探るのではなく、人が本来大切にしてきたものを受け継いでいくことを大切にすることこそがよいのではと思うようになりました。そして生き方全般に先の世の中を生きてきた先人と呼ばれる人の教えを学び、自分に問いかけてみることで見えてくるものがあるように思いました。『一灯を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うることなかれ。ただ一灯を頼め。』という言葉のように、自分が今まで育んできた保育観を頼りに、大切にしていきたいと思っっていることを職員にも保護者にも伝えていこうと思えました。その後、重職心得箇条や一斎塾で販売している名言録集を読んで

みました。その中には、自らを鏡に映しているかのように、私に対する忠告がたくさんありました。

仕事で上手くいかないことを人のせいや、世の中のせいにして自分自身が気がつきませんでした。その後岩村に月に数回足を運ぶようになりました。一斎塾で出会った人たちは、私の人生の先輩と呼べる人たちばかりでした。先人からの教えをこの先輩方から学ぶにつれ、自分が私の後輩の世代につれないけたらと思うようになりました。

特に子ども時代に心のあり方を体験と共に学ぶの重要性は、食育や環境教育を通して、自分が現場で実感しているものでした。だからこそ、自分たちが学ぶだけではなく、子どもたちにも伝えていける仕組みを作りたいと思うようになりました。

今後も佐藤一斎の教えを学んだ先輩方と一緒に世代を越えて、自分の生き方を見つめ、困難にぶつかった時に、それを乗り越える糧になるよう、先人の教えから、共に学んでいけるような地域づくりのお手伝いを少しでもさせていただけたらと思っています。今後とも、学ばなら恵那、生きるなら恵那と目指して、一斎塾に期待したいと思っています。共に頑張っていきましょう。

想

会員 後藤 歌子

幕末の偉大な碩学、佐藤一斎先生。歿後百五十年有余たった今、先生の教えに出合うことができ又すばらしい指導者の方々に恵まれ、ありがたい感謝の気持ちでいっぱいです。

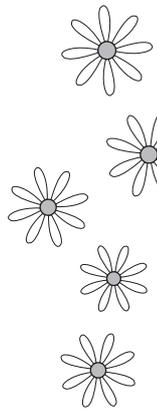
現在の私達は物にあふれ、何一つ不自由のない生活に、毎日感謝です。

しかし一方で物質面で豊かになればなるほど、心の豊かさが失われて行く様な気がしてなりません。

春風を以って人に接し
秋霜を以って自ら肅む

(言志後録 三十三)

毎日を、こうありたいと心に祈念し、逆境は自分を強くする、チャンスと思い、朝のあいさつ運動からはじまり、一斎先生の心、精神、言葉を大事にして、家族の絆人づくり、心そだての輪を、広げて行きたいものと、おろかながら思っています。



一斎塾の取り組み

- (1) 佐藤一斎の教え(言志四録)を学ぶ定例学習会の開催
- (2) 郷土の先人や歴史に関する公開講座及びワークショップの開催
- (3) 各種団体等からの要請による郷土の先人に関する講師の派遣
- (4) 郷土の先人に関する情報誌・書籍の発行
- (5) 郷土の歴史や先人に関する書籍・論文・資料の収集
- (6) 郷土の先人の知恵を今に活かすイベント・フォーラム等の開催及び協力
- (7) 郷土の先人から学ぶ関係団体との研修会及び交流会の開催

あとがき

この度の東日本大震災の被災者の皆様に御見舞い申し上げます。創刊号が平成十八年十月十五日発行より早、第十号の発行となりました。多くの先生方、会員の皆様の寄稿と御協力のお陰と感謝いたしております。この塾報が少しでも生涯学習に役立てばと願い今後共より良き塾報となります様努力してまいります。

編集部一同